COMBAT
コンバットマガジン
May,2024
No.578
5

Cover Photo
U.S. NAVY
ⓒ WORLD PHOTO PRESS 2024
※本文中の価格は消費税込みの総額表示です。

CONTENTS

008 SIGの存在を世界に知らしめた
傑作、220番台ピストルSIG series
P210/P220/P224/P225/P226/P227/P228/P229
Report by Ken Nozawa　図版解説／鈴木健太郎

004 第67回 サイゴン物語 Saigon Memories
MACVがいたベトナム戦争「入口から出口まで」〔16〕

034 ベトナムで戦った
アメリカの同盟国軍 Part 3

040 LIFEが語るベトナム戦争
20世紀アメリカ社会と兵士の顔　文／原克（早稲田大学教授）

050 ベトナムを遠く離れて――。
silencer その2　文／小倉 徹

The Equipments of the U.S. Force
055 [現用米軍装備カタログ]
1990~2000年代の特殊部隊NAVY SEAL装備特集
LBT製0290チェストリグ装備編　解説／松原 隆

066 ウエスタン アームズ新製品リポート
Report by SHOTGUN MARCY
●LAヴィッカーズ・カスタム
ローズウッド・グリップ・バージョン

070 タナカ・ワークス新製品リポート
Report by SHOTGUN MARCY
●『帰ってきたあぶない刑事』
オフィシャル・ライセンス・プロダクト
大下勇次モデル/M10 2インチ・アーリー
HWスタンダード／デラックス

074 トイガンニュース
ウエスタン アームズ
●V10ウルトラ・コンパクト CBHWバージョン
タナカ・ワークス
●S&W M10ミリタリー&ポリス4インチ
.38スペシャル ニッケル・フィニッシュ Ver.3

076 Militaria Roundup!
U.S. NAVY ウインター・フライング・スーツ

083 東京マルイ
ガスブローバック・ショットガンSAIGA-12SBS

091 月刊 THEグリーンベレー GREEN BERET
特殊部隊CIF中隊特集 Part5　解説／DJちゅう

ニッポンのちからこぶ　写真・文／菊池雅之
096 新編・第2特科団

100 新製品情報 COMBAT mono

ボスゲリラ不屈のトイガン魂!
102 サバゲ・マスカラ・コントラ・マスカラ!

104 サバゲ三等兵APS部
泣きっ面にAPSの神!?
我らサバ三APS部 第32期開幕! の巻

COMBAT FRONT LINE
107 今月の中田焦点! HELIKON-TEX
ブッシュクラフトライン スーパーターブ®
108 新作映画情報『アイアンクロー』『ブリックレイヤー』
『流転の地球 -太陽系脱出計画-』

106 レアミリタリーテクノロジー
109 読者プレゼント & CIC
110 バックナンバー
111 次号予告&奥付

Photo/Library of Congress

Photo/Ken Joyce

ミリタリースポッター

In the extraordinary setting of the battlefield, elements of everyday life find their way in. One of the most notable instances is the time devoted to sewing.

Soldiers, amidst the chaos of battle, take up needle and thread to mend garments or attach buttons. Such scenes have been captured even during the Civil War. Both the US and British armies provided soldiers with sewing kits, known as “housewives,” “hussif,” or holdall. These kits typically contained needles, thread, and replacement buttons as essential items. The Canadian military “housewife” featured in this photograph, complete with insignia patches, is particularly rare.

戦場という非日常の場に、日常の生活の一部が紛れ込む。裁縫の時間は、その最たるモノの1つであろう。兵士が戦いのさなかに針と糸を手にして繕いものをする、もしくはボタンを付ける。南北戦争時代にも、そんな写真が撮影されている。米軍や英国軍では、兵士たちに装備品の1つとして裁縫キットを支給していた。それが「ハウスワイフ」、「ハシッフ」もしくはホルダオールと呼ばれる。中身は針と糸、付け替え用のボタンが基本アイテムである。この写真にあるような、インシグニアパッチが付属しているカナダ軍の「ハウスワイフ」は、たいへんに珍しい。

SIGの存在を世界に知らしめた

傑作、220番台ピストル

SIG series P210/P220 P224/P225 P226/P227 P228/P229

銃器の製造において高い知名度を誇るSIG SAUER社。特に同社のピストルは我が国でも制式となっている物もあり、その品質と性能には定評がある。日々進化を続けるSIG社の歴史と哲学をピストルの系譜を追いながら考察する。

Report by KEN NOZAWA

図版解説／鈴木健太郎　Photo/U.S.ARMY、U.S.NAVY、USAF、USMC、U.S.COAST GUARD、JAPAN AIR SELF DEFENSE FORCE、JAPAN MARITIME DEFENSE FORCE、WPP ARCHIVES

P226の耐腐食仕様、Mk25 Mod 0を手にしたSEAL隊員。ライバルというべき存在のベレッタM92Fがスマートな外見を持つのに対しP226は質実剛健なデザインで見た目にも安心感がある。P226はM92Fのアメリカ軍仕様、M9が普及した後もSEAL隊員の間で高い人気があったのだが、それもそのはずでSEALではスライドが破損するというM9の初期不良により3人の負傷者を出していた。

SIG series P210/P220/P224/P225/P226/P227/P228/P229

P226の分解図。ここで描かれているのはフレームがレイルシステム対応となり、グリップのデザインが改められた新しいバージョンだが、基本的なデザインはP226やその他のP220番台と共通である。ダブルカラムとなった弾倉は形状がベレッタM92Fのものとほとんど寸法が変わらず、非常に興味深いことにアメリカの軍では入手の容易なベレッタの弾倉にマガジンキャッチ用の穴を開け直し、P226やそのコンパクトモデルの予備弾倉とした例がある。

保険、製薬、観光などが主要な産業であり、機械工業、化学工業、時計産業なども盛んだ。

時計産業も含め、スイスが精密機器製造で名を高めた理由として、地理的な要因や歴史的な背景が関係してくる。ここの流れは後の220番台ピストルにも関係して来るため、少し詳しく書きたい。

スイスは16世紀の宗教改革によって多くのプロテスタントの職人を受け入れたが、彼らは高い技術力と勤勉さを持ち、後にスイスの精密機器産業の発展に直接的に貢献している。特に、17世紀、フランスで迫害を受けたユグノーと呼ばれるプロテスタントのスイスへの移住はスイスの時計産業の発展に大きく役立ったとされている。

またスイスという国は山岳地帯が多く、農業に適した土地が少ないため、人々は昔から手工業や精密機器製造に力を入れてきたという事情もある。そこに運よくというべきか、山岳が多いことから豊富な水力資源を持ちえたことで水力エネルギーを利用した機械工業が発展することにつながったのだ。ただ、石油をはじめとした各種地下資源には乏しく、そこは輸入に頼ることになる。とはいえ、スイスは自由貿易を推進しており、国際市場へのアクセスが容易という条件も揃っていることが、製造業を後押しすることとなった。

もちろん、スイス人の気質もまた、精密機器製造に適していたとされている。それというのも、彼らは勤勉かつ時間厳守で知られており、そもそもの教育レベルが高かったことと、几帳面で物事を丁寧にこなす性格が備わっていたこともあり、品質へのこだわりが強く、高品質な製品を生み出す素地が全て揃っていたと言えるのだ。その辺の気質は日本人とも似た部分である。

ここでひとつ、スイス時計にまつわる史実を紹介したい。

遡ること半世紀。1974年。その年、腕時計のTVコマーシャルが流れた。ある日本の時計メーカーが、新開発の腕時計を発表したのだ。アクション俳優として有名な故・千葉真一を起用し、派手な動きを見せつつ、決め台詞を放った。「ピタリ、正確！」。そのコマーシャルでは、画面の右下にひとつのクレジットが表示されていたが、そこには、「月誤差30秒以内」とあった。「月誤差30秒以内」。つまりは1ヵ月間での時計の誤差が30秒以内だというのだ。

その説明に当時の日本人は驚き、疑った。

“1ヵ月間での誤差が30秒以内なんてありえない！”という声で埋め尽くされた。実はその時代、サラリーマンの日課として出社時、自宅を出る前にTVの隅に映し出される時刻を頼りに、自分の腕時計を正しい時刻に合わせるという作業があった。毎日、それを行なっていた。というのも1970年代の腕時計は機械式で、精度の高いものでも1分や2分のズレは毎日発生し、5分や6分の誤差を見せるモノも少なくなかったからだ。そのため、毎朝、腕時計の修正が必要とされていたことになる。

令和の現代に生きる人からすれば月誤差30秒以内など少しも驚く話ではなく、電波時計が常識の今では、100年でも200年でも誤差は「0秒」なのだが、当時、月誤差30秒以内は異次元というよりも「嘘話」としか受け止められなかった。

その新型の腕時計とはクオーツ式で、クオーツ式時計そのものは以前から存在していたものの、小型化と耐衝撃の課題があり、腕時計（のサイズ）で市場に発表されたのが1970年代であった。結果、超高性能（高精度）のクオーツ式腕時計は世界の腕時計市場を席巻することとなった。1970年代から80年代にかけて世界中に広まり、日本の時計産業は世界の時計産業に大打撃を与えたのだ。

1980年代初頭。スイスの時計産業界は大いなる選択に迫られた。クオーツ時計に押され、これまで絶対的と信じられていたスイスブランドの衰退が始まっていたからだ。このまま機械式の腕時計を作り続け、消えるように廃業していくか、それとも思い切ってクオーツ時計に軸足を移し、新しい歴史を創っていくか、そのどちらを選ぶか迫られたのであった。

侃侃諤諤（かんかんがくがく）の議論の結果、スイスは従来の機械式を選び、近い将来の廃業も視野に入れての道を進むこととなった。それは、時計産業に関わる人の多くが職人気質で昔からの伝統を守りたいという考えを持っていたこともあるが、その実、当時のスイスにはクオーツ式腕時計を生産するだけの工業力もノウハウもなく、仕方なしの選択であった。

“スイス時計の歴史も終焉を迎えるのか……”と、そう思われたとき、ひとつの追い風が吹いた。1980年代も後半に入ると、機械式腕時計の人気が再燃し始めたのだ。“クオーツ式と違って、機械式はなんだかロマンがある”という声が高まると、売り上げは持ち直し、スイス時計産業は息を吹き返し、やがて大いに盛り返すこととなった。ちなみに、その好機の切っ掛けを作ったのは、スイスから輸出される時計の半分を輸入・購入していた日本人によるものだった。スイス時計を危機に追い込んだのが日本なら、そのスイス時計を救ったのも日本であり、この史実は現在もスイスの時計産業界の間で語り継がれている。

ライン川の流れを活かした創業 それがSIGの歴史と伝説の起点

スイスという国と国民性も知れたところで、主役であるSIGに話を移そう。

SIG社の始まりは、その前身となるシュヴァイツァー・ヴァッゴン・ファブリック社（= Schweizerische Waggon-Fabrik：SWF）を、フリードリヒ・ペイエル・イムホフ（1817〜1900）、ハインリヒ・モザー（1805〜1874）、ヨハン・コンラート・ネヘール（1818〜1877）の3名が中心となって、1853年に創業したことに遡る。社名からも察しがつくと思われる

（上）（右）（右下）220番台ピストルから弾を取り出す手順を示したイラスト。マガジンキャッチを押して弾倉を外し、スライドを引いて薬室内の弾を出し、スライドストップを押してスライドを前進させたら弾倉内の弾を抜き取る。この作業は常に銃口を安全な方向へ向けながら行ない、スライドを引いた際には薬室内に弾が残っていないか必ず確認しなければならない。（下）デコッキングレバーの操作方法。220番台はこのレバーを下げるだけで素早くかつ安全にハンマーを元の位置に戻すことができる。220番台にはダブルアクションオンリーのモデルもあり、そのモデルには当然ながらこの機構がない。

ベトナムで戦った アメリカの同盟国軍 Part 3

アメリカの呼びかけで作られた自由世界軍、FWMFの活動を陸軍を中心に紹介するシリーズ、第3回は小規模ながら確かな働きぶりを見せたタイとフィリピンを取り上げます。

文／鈴木健太郎　写真／U.S.ARMY, NARA, AUSTRALIAN WAR MEMORIAL, WPPアーカイブ

THAILAND

ベトナムに近い位置にあり、アメリカ空軍が1961年から活動を始めていたタイでは朝鮮、ベトナムと続く共産勢力の台頭に強い危機感を持っており1964年に空軍の分遣隊を南ベトナムに派遣したあと、67年10月には陸軍の戦闘部隊、クイーンズコブラ連隊がアメリカ陸軍第９歩兵師団と連携しながら活動を開始した。クイーンズコブラ連隊は67年の時点でおよそ２千人の兵力しかなかったにも関わらず勇敢な戦いぶりでアメリカ軍の注目を集め、68年から69年にかけて約１万１千人の兵力を持つ新しい部隊、ブラックパンサー師団がクイーンズコブラ連隊と入れ代わる形で南ベトナムに到着、アメリカ陸軍第2野戦軍の指揮下でこの地での戦いに加わった。空軍の分遣隊と陸軍ブラックパンサー師団に加えて海軍のLST部隊も参加していたタイ軍部隊はラオスやカンボジア、そしてタイ国内の情勢が不安定になったことを受け1972年４月に名目上の部隊を除いて撤退を完了したのだが、悲劇的な運命を辿った南ベトナム軍やアメリカ軍とは対照的にタイ国内では自国の共産化を防いだ英雄として今日でも肯定的な意見が多く聞かれる。

トラックで移動するクイーンズコブラ連隊の兵士たち。左肩にはタイ国旗をアレンジした記章が見えるが、アメリカ陸軍第9歩兵師団との協調するにあたって左肩にアメリカ第９師団、右肩にタイ国旗とコブラを組み合わせた記章を付けた例も見られるようになる。

(左)当時のアメリカ陸軍参謀総長、ジョンソン大将の閲兵を受けるクイーンズコブラ連隊の将校。サブデュードとなった記章は右胸がネーム、左胸にはROYAL THAI ARMYと記されたテープで、左肩のタブにもTHAILANDという表記がある。(右)解放戦線の拠点を攻撃するクイーンズコブラ連隊所属のM132自走火炎放射器。M113装甲兵員輸送車を改造して作られたこの車両は兵員を収容するスペースに容量50ガロンの燃料タンクが４個備え付けられており、火炎を最大で170m、最長で32秒放射することができた。(右下) 地図を見ながら進路を確認するクイーンズコブラ連隊の将校。右の将校が首から下げているのは仏像のペンダントで、敬虔な仏教徒の多いタイ軍部隊ではこの種のペンダントをいくつも身に付けた兵士が多く見かけられるとともに、彼らが戦闘などで損傷した寺院に出くわした際には全力でその修復にあたった。

小休止中に池の水で身体を冷やすクイーンズコブラ連隊の兵士たち。左の兵士は当時採用されたばかりの新型折りたたみ2クォート水筒を腰に付けている。この水筒はカバーが耐久性の乏しいゴム引き布地で作られていたため、のちにナイロン製に改められた。

(左)軍旗とともにサイゴンの港へ降り立つブラックパンサー師団の兵士たち。彼らはタイ国旗と黒豹をモチーフとした記章を着用した。(上)建設現場の警戒にあたるクイーンズコブラ連隊の兵士。危険度の高い場所ではないようでM1カービンには弾倉が挿入されていない。(上右)姿勢を低くして周囲の状況を確認するクイーンズコブラ連隊の兵士たち。ベトナムで活動したタイ軍部隊の武器と被服、そして装備品は自国製とアメリカからの供与品が混用されていた。

(左)兵舎に部隊のエンブレムを描くクイーンズコブラ連隊の兵士。(右)タイ国内における訓練の様子を捉えた写真。タイには1966年以来アメリカ陸軍特殊部隊(第1特殊部隊グループD中隊、後に第46中隊と改称)が駐留し、タイ軍に対ゲリラ戦や長距離偵察のノウハウを伝授していた。

LIFEが語るベトナム戦争

MEMENTO MORI

20世紀アメリカ社会と兵士の顔

文／原克（早稲田大学教授）構成／編集部

第6回
ヤンキー・パパ13号機の嘆き
死を想え（メメント・モリ）、勝者なき戦場

ヴァルター・ベンヤミン「経験の貧困」によれば、第一次世界大戦下、戦場からもどってきた兵士は誰もが皆、無口だった。
戦場で何があったのか？　あの塹壕戦の意味は何だったのか？　友は何のために死んだのか？
語るべき経験がなかったのではない。語るべきことは多くあった。しかし、語れなかった。意味づけできなかったのである。
目の前の経験はリアルだったが、それが一体どんな意味を持っていたのか。それが分からなかったのだ。
具体的経験という「小さな物語」に、戦争の意味という「大きな物語」を関連付けられない。
個別的経験が全体的意味を見失う。経験が貧困化したのである。
全体的意味を剥奪された経験。これが逃げこむ先は、勇気・正義・英雄など---ロマン主義的個人主義という神話構造の中だ。
ベトナム戦争の泥濘化。兵士たちの経験は貧困化した。『ライフ』誌が語ってみせる神話構造の哲理とは。

"頭蓋骨=死"のイメージは文化や民族の垣根を越える。ここではアメリカ軍によって手榴弾が付け加えられ、死がより身近で、かつ現実味を帯びた姿となっている。Photo/NARA

露出と隠蔽

『ライフ』1964年6月12日号は、特筆すべき一冊である。

ベトナムへの介入以来、アメリカ軍人の死体を、リアルな映像で大きく掲載した、おそらくは最初の号だからだ。

「アメリカ人が友人を救おうとする」[1]と題された記事である。

その日、サイゴン南西、メコン・デルタ近くに位置するキン・ロン村に、南ベトナム軍の武装兵員輸送部隊が展開していた。

軍事顧問として随行し、部隊を指揮していたのは「痩身のアメリカ軍中尉」[1]。名前は伏せられている。

翌日、ゲリラの急襲を受け、部隊長のベトナム軍大尉が被弾し、倒れた。それを見た痩身の中尉は駆け寄ろうとした。が、その瞬間、敵の銃弾に胸を射ぬかれて、即死してしまった。

同行取材をしていたのが日本人カメラマン岡村昭彦だった。岡村は至近距離から、倒れた軍事顧問を撮影している。

『ライフ』が全ページ大カラー写真で掲載したのが、この写真だ。【右掲載：上】

キャプションにはこうある。「死んだアメリカ兵。担架で運ばれる若いアメリカ人中尉の死体。およそ130名以上のアメリカ人が、これまでベトナムで殺害されている」[1]。

細部まで明視できるリアルな写真だ。血に染まった軍服に、力なく畳まれた腕。横向きになった頭部。死の痕跡が、手に取るように分かる画像だ。

それでいて、慎重に顔面が枠から外してある。苦悶の表情などは切除されている。加えて、最後まで戦死した中尉の身元は、明かされない。編集意図であろう。

この死体の写真は、顔貌も名前も伏せられている。すべて匿名性のうちに提示されている。

すべてを露出するわけではない。しかし、すべてを隠蔽するわけでもない。露出しながら隠蔽し、隠蔽しつつも露出する。この微妙な狭隘をゆく表象戦略が、この写真に含意されている歴史的位置価値を、却って露呈させる。

おそらく1964年が、「アメリカ兵の死体」のメディア露出が、転換点を迎えた時期である。その表徴がこの記事だ。

そして、その編集原理の転換は、ベトナム戦争そのもののアメリカ社会における意味の転換と、明確に呼応している。

大統領の決意

ベトナム戦争の転換点が、「暗示された死」によって明示される。

1965年2月6日深更、アメリカ空軍基地が奇襲を受けた。カンボジア国境沿いの中部山岳地帯にある「プレイク空軍基地」だ。

ベトコンによる本格的な夜間攻撃で、アメリカ兵の死者8名、負傷者128名。大損害を受けた。

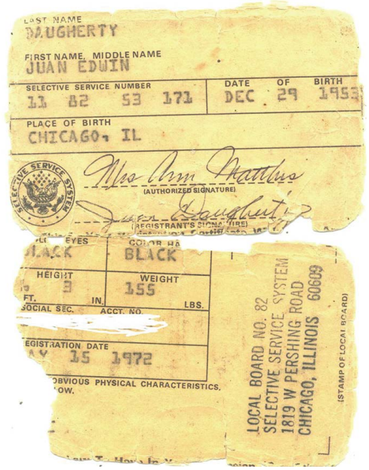
ジョンソン大統領は抜け目なかった。

この甚大な損害を以て、本格的にベトナムに軍事介入する格好の口実とすることにした。「報復処置と称して」、大統領は北ベトナムに爆撃機を送り、ベトコンの中継地点を攻撃させたのだ。いわゆる「北爆」のスタートである。

『ライフ』1965年2月19日号も、早速、事態の本格的な変化を分析している。

「われわれのベトナムへの新しい関わり方」[2]と題された記事だ。

見開き2ページのカラー写真が強烈なメッセージを発している。プレイク基地のワンシーンだ。



ベトナム戦争時の徴兵カード。戦いが泥沼化し、アメリカ国内で反戦感情が高まると徴兵された若者がこのカードを燃やして抗議する姿がテレビを通じて大々的に報じられるようになった。

上／「アメリカ人が友を救おうとする」。「大尉率いる南ベトナム軍の小隊が戦線に偵察に出た。アメリカ人将校は南ベトナム政府軍の軍事顧問だ」。アメリカ軍中尉は藪を走って戦友のベトナム軍大尉を助けようとした。彼は胸に直撃弾を受けており、倒れて死んだ。　下／「彼らは少数だが戦闘を続行する」。心優しきアメリカ兵の図像。政治顧問として指導している南ベトナム政府軍ベトナム人大尉と友情関係になったアメリカ陸軍中尉は、戦場で奇襲攻撃を受けたときも僚友のベトナム人大尉のもとに駆けより手当てをしようとする。この記事は、ロマンチックな個人のエピソードで戦争の基本構造を隠蔽する神話物語で構成されている。（上下共にLIFE 1964-6.12）

[1] "The American tried to save a friend" in: LIFE, 1964, June 12, p.40ff.

THE EQUIPMENTS OF THE U.S. FORCE

第200回［現用米軍装備カタログ］
「海」装備特集 part 14
1990～2000年代の特殊部隊NAVY SEAL装備
LBT製0290チェストリグ装備編

●解説／松原 隆　●撮影／山崎 学　●協力ショップ／LAZY CAT、トイソルジャー、TRi'S（旧特小工房）　●協力／木島秀邦　●参考資料:Hobby Box

チェストリグとは――？

サスペンダー式のピストル・ベルトに装着されたマガジン・ポーチよりも、胸の位置に設けたマガジン・ポーチの方が、あらゆる戦闘姿勢で弾薬補給が早く容易にできる。これを可能にしたのがチェストリグだ。タクティカル・ロード・ベアリング・ベストや現行のプレート・キャリアもベルトより上部の位置にマガジン・ポーチが存在している。

また、既存の弾薬装備にチェストリグの弾薬を追加することによって継続制圧射撃が可能となる。これは特殊部隊等の少人数の偵察部隊が、より大きな敵部隊との交戦から脱出するためのブレック・コンタクト初期段階の撤退戦術だ。例えば、あるネイビーシールズ部隊の場合、接敵からわずか数分で数千発の弾丸を敵部隊に浴びせ、敵部隊に大部隊と交戦しているかのような錯覚を起こさせる。それによって心理的ダメージを負った敵部隊の前進が遅くなり、反撃も弱まるため、体勢を立て直すための充分な距離を置くことが可能となるのだ。これを専門用語でセンター・ピール戦術と呼ばれている。有名な映画『ティアーズ・オブ・ザ・サン（2003年公開）』の中で、ブルース・ウィリス演じるウォーターズ大尉のSEALユニットが大規模なナイジェリア反政府軍から撤退する際に実演されている。

取り出しやすさからマガジン・ポーチにはM4マガジン以外に各種グレネイド、対空マーカー・パネル、ファーストエイド・キット、拳銃などを個人が工夫して装備している。

TOYGUN REPORT

L.A. VICKERS CUSTOM

Real Wood Grip Ver.

WESTERN ARMS

戦闘のプロがカスタム・アップした
M1911に天然ウッド製の
グリップを組み合わせた
タクティカル系高級モデル

●Photos & Text by SHOTGUN MARCY
㈱ウエスタン アームズ☎03-3407-5922
http//www.wa-gunnet.co.jp

※撮影用のモデルはプロトタイプのため、量産品とは仕様が異なる場合があります。

LAヴィッカーズ・カスタム
ローズウッド・グリップ・バージョン
●全長:約220㎜　●銃身長:114㎜
●重量:約872g　●装弾数:23+1発
●価格:5万2,800円　●絶賛発売中!!

フレーム右側のダスト・カバー部分に、彫刻機で深くシャープに刻まれたラリー・ヴィッカーズのロゴ。スライド側面のトレードマークや刻印類も、彫刻機で丁寧に再現されている。

グリップ・パネルはウォールナットと共に、銃器用のグリップ、ストックなどに長年使用されてきた高級天然素材、ローズウッド製のダイヤモンド・チェッカー・タイプ。赤味の強い色合と木目がしっとりとした質感の黒い本体によく映える。

1970年代半ばに創設されたスプリングフィールド・アーモリー（以下、SFA）は、1968年に閉鎖されたアメリカの国営造兵工廠を引き継ぎ、精度の高いM1911系セミオート、軍用モデルをベースにクオリティ・アップを図った各種のスポーツ・ライフルなど製作してきた。

1980年代にはマスプロ製を大きく凌ぐ高精度のM1911系セミオートが、全米のレース・シューターに認められ、ハイ・クオリティなM1911カスタムを製作するファクトリーとしてのポジションを確立。同時に軍・警察関係、民間を問わず、注目を集める存在になった。

各種のM1911系ブローバック・ガスガンを製作するウエスタンアームズ（以下、WA）では、今月SFAのM1911をベースにカリスマ・インストラクターがカスタム・アップしたヴィッカーズ・カスタムのデラックス・バリエーションを発売する。これまで様々なフィニッシュで製作され、多くのガバメント・ファンを魅了してきたヴィッカーズ・カスタムの最新バージョンだ。

ヴィッカーズ・カスタムは、日本でもよく知られているアメリカのカリスマ・インストラクター、ラリー・ヴィッカーズが、自身の経験と知識を基にカスタマイズして愛用していたM1911。10代で米軍に入隊してグリーン・ベレーに所属し、予備役となった時期に機械工学を学ぶと共に、秀逸なレース・カスタムを製作することで一世を風靡したガン・スミス、スティーブ・ナストフの元でカスタム・テクニックを極めたヴィッカーズが、機能性の高い戦闘用セミオートを目指してカスタム・アップしたM1911だ。

米軍に再入隊して陸軍デルタ・チームに所属し、1989年のパナマ侵攻に参加したメンバーのひとりでもあるヴィッカーズは、過酷な作戦に従事しながら、任務遂行に欠かせない近代的なコンバット・テクニックと、そこで求められる理想のガバメントを研究。積み重ねてきた実戦経験と、身に付けたカスタム・テクニックのすべてを注ぎ込まれたヴィッカーズ・カスタムは、M1911本来のプロフィールを残したシンプルな外観が、大きな魅力のひとつになっている。物々しさや見かけの豪華さよりも、戦うために必要不可欠な装備を追求してシェイプした結果のM1911。それが、L.A.ヴィッカーズ・カスタムだ。

機能美溢れるプロフィールを正確に再現したWAのヴィッカーズ・カスタムは、フレームとスライドに、金属粉を混入したHW素材を採用。ガンブル

TOYGUN REPORT

TANAKA WORKS

『帰ってきたあぶない刑事』OFFICIAL LICENSE PRODUCT

大下勇次モデル

M10 2inch Early Heavy Weight STD/DX

TVシリーズのスタートからおよそ40年――。
現在も多くのファンを熱狂させる日本のバディ・アクション
『あぶない刑事』のオフィシャル・モデルガンが、タナカ・ワークスから登場!

●Photos & Text by
SHOTGUN MARCY
㈱タナカ・ワークス
https://www.tanaka-works.com

※撮影用のモデルはプロトタイプのため、量産品とは仕様が異なる場合があります。

STANDARD

『帰ってきたあぶない刑事』
オフィシャル・ライセンス・プロダクト
大下勇次モデル/M10
2インチ・アーリー HW スタンダード
- 全長:175㎜
- 重量:約600g(カートリッジ6発含む)
- 装弾数:6発
- 価格:4万9,500円
- 5月中旬発売予定

タナカ・ワークスがS&W Kフレームのモデルガン・シリーズに、M10 2インチ・アーリー・タイプをラインナップする。このモデルは、サブ・ネームに「大下勇次モデル」とあるように、1986年からTV放映された刑事アクション・シリーズ『あぶない刑事（以下、あぶデカ）』の最新劇場版『帰ってきたあぶない刑事（2024年5月24日公開予定）』で、柴田恭平氏が演じるユージ（大下勇次）が使用するリボルバーのオフィシャル・モデル。緩いテーパーのバレルと低いサイトリブが特徴の戦後型スタンダード・バレルのM10 2インチが再現されている。HW製マット・フィニッシュの本体が、実用リボルバーの佇まいだ。

1986年にスタートし、約2年に渡ってTV放映された『あぶデカ』シリーズは、同時期に劇場版を公開。アメリカのバディ・ムービー『スタスキー＆ハッチ』をモチーフにした構成と軽妙なセリフのやり取り、派手なアクションで、多くのファンを狂喜させてきた。2016年に公開された『さらばあぶない刑事』で刑事を引退してから8年、今回は私立探偵というポジションでバディを組んだユージとタカが暴れまくるというストーリーだそうだ。

スタンダード・タイプには弾頭部分に特殊銅メッキを施した.38スペシャル・タイプの発火用カートリッジが6発付属。コレクターにとっては嬉しい空撃ち用スプリングも付属する。

日本の警察にも配備されていたことのあるS&W M10の2インチを正確な外観で再現。1960〜1968年頃に輸入されたアーリー・モデルを示すバレル・ピンが、金属製の別パーツで再現されている。

ミリタリア・ラウンドアップ!

Militaria Roundup!

U.S. NAVY ウインター・フライング・スーツ

アメリカ海軍ユニフォームの中でミリタリー・ファン以外にも人気の高い各種フライトジャケット。
今回は前回までの海軍ユニフォーム編を補足する形で、1950~60年代のウインター・フライング・スーツを紹介しよう。

解説／菊月俊之　写真／青木健格　撮影協力／MASH☎06-6567-3312 http://www.mash-japan.co.jp、
中田商店☎03-3823-8577 https://www.nakatashoten.com

アメリカ海軍航空局/BuAer

以前に海軍ユニフォームの特集でも触れたが、アメリカ海軍のユニフォームに関する資料は極端に少ない。アメリカ海軍航空は1910年にワシントンI.チェンバース大佐が海軍航空に案件処理担当に任命されたのが始まりだが、その活動が本格化するのは1921年に海軍航空局（Bureau of Aeronautics/BuAer）が創設されてからとなった。20年代には航空機の技術的進歩と艦隊における航空機の使用頻度が増大。また空母の艦載機、水上母艦から運用される哨戒機、そして戦艦や巡洋艦に搭載する偵察機が海軍航空局によって開発されている。

同時に飛行服の開発も航空局によって行なわれ、1926年には各種飛行服と着用に関する回覧書簡が全海軍航空部隊に通達されている。20～40年代における海軍飛行服に関する資料は極端に乏しいが、スライドファスナーの使用やフライトジャケットの素材にコットンとアルパカ・パイルを用いたものが存在するなど、先進的なものが存在している。

第２次大戦では陸海軍共通の飛行服も開発されたが、AN-6552およびAN-J-3Aフライトジャケットは実質的に陸海軍共通のスペックを持った海軍モデルだった。そして1959年に海軍航空局は海軍兵器局（Bureau of Oednance/BuOrd）と統合されて海軍兵器局（Bureau of Naval Weapons/BuWep）に移管。現在BUWEPは海軍航空システム司令部（NAVAIR）となっている。

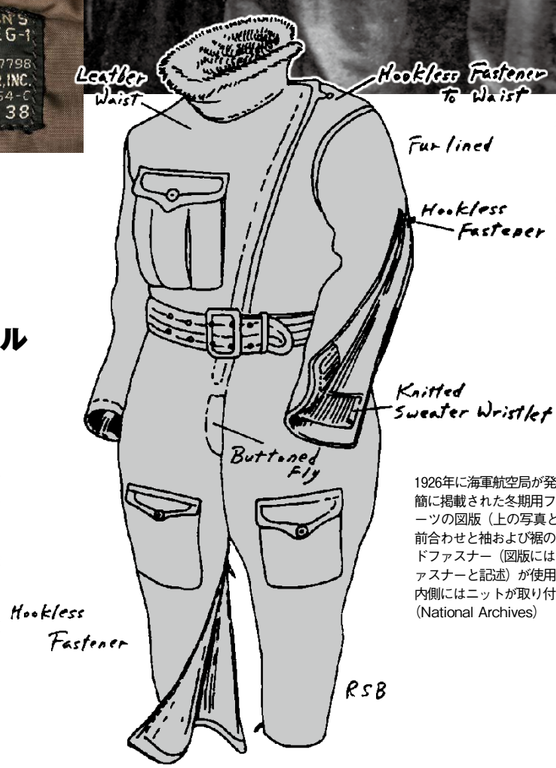
ラベルのBuAerとBuWep
海軍の航空機と各種装備の開発は航空局（BuAer）が行ったが、航空機の開発はしばしば兵器局（BuOrd）との間に摩擦を生じることがあった。このため1959年には両者を統合して新たに兵器局（BuWep）が設立された。これによりフライトジャケットのラベル表記にも変更が加えられた。左が1940年発注分のM-422ジャケット、右が69年発注分のG-1ジャケット。M-422では大きく“Bu-AERO”と表記されているのに対しG-1では３行目のスペック末尾に“(WEP)”と表示されている。

海軍フライトジャケット着用のルール

アメリカ海軍は飛行服と徽章等の着用に関して服装規定を設けているが、ここでは現行のフライトジャケットに関するものを紹介しよう。

飛行服は航空機搭乗員と飛行任務に関連した兵員に着用が認められるもので、地上整備員や非搭乗員の支援業務担当には着用が認められていない。CWU-45/PおよびCWU-36/Pはフライトスーツと一緒に着用することが認められているが、基地外での着用は認められない（スーツは可）。また勲章の略綬を着用した制服と一緒に着用してはならない。

ジャケットは清潔で軍務に支障のない状態に保ち、正面のジッパーは最低3/4閉じる。そして破れ、汚れ、補修困難な擦り切れを生じた場合は新品と交換すると規定されている。またパッチに関しては「司令官の指導に従い、個人の裁量でベルクロまたはジャケットに直接着用できる」とあり、着用するパッチは「保守的で海軍航空のプロ意識を反映したものとなる」と記されている。



1920年代の海軍飛行士。彼らが着用しているのはワンピースの冬期用カバーオールで、襟とライニング（内張り）には毛皮が使用されている。左端の飛行士は右２人と裁断の異なるスーツを着用しているが、詳細は不明。（Photo/U.S. NAVY）

1926年に海軍航空局が発行した回覧書簡に掲載された冬期用フライング・スーツの図版（上の写真と同じタイプ）。前合わせと袖および裾の開きにスライドファスナー（図版にはフックレスファスナーと記述）が使用され、袖口の内側にはニットが取り付けられている。（National Archives）

ウインター・フライング・スーツ・ジャケット（WEP）
JACKET,-WINTER FLYING SUIT

“WEP（ウェップ）”や“G-8”と呼ばれ、ミリタリー・ファン以外にも人気の高い海軍のフライトジャケットだが、この呼び名は便宜的なもので、制式名称は“Jacket-Winter Flying Suit（冬期用フライング・スーツ・ジャケット）”で、型式は入っていない。“WEP”は航空装備を開発する海軍兵器局（BuWep）に由来し、“G-8”はアビレックス社が販売した複製品の商品名に由来している。なお、本稿では便宜的にJ-WFJの略称を使用させていただく。

J-WFJは後述する冬期用AL-1ジャケットとWL-1トラウザーズの後継として1954年に採用された飛行服で、制式名称に“スーツ”とあるが、これは海軍冬期用飛行服がジャケット、トラウザーズ、カバーオール（Winter Flying Suit）、そしてフードで構成されるのが理由。素材をコットンからナイロンに変更したのが特徴となっている。

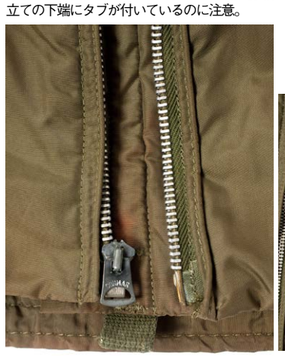
J-WFJのスペックはMIL-S-18342からMIL-S-18342Cまで３回の改訂（末尾のアルファベットが改訂を表し、１番目の改訂は“A”となる）が加えられており、４種類のバリエーションが存在する。最初のモデルは表地とニットの色がカーキだったが、２番目（A）のモデルではニットがグリーンに変更。３番目（B）のモデルではナイロンの色がグリーンとなり、４番目（C）のモデルではグリーンの色調が濃くなり、袖口のニットがV字カットに変更されている。J-WFJは1975年まで生産され、その後CWU-45/Pと交代している。

ラベル
ラベルは織りラベルで、表記されたアイテム名には型式の表示がなく、これが“WEP”の俗称が付けられた理由。ここで紹介するJ-WFJは1960年の発注分で、４行目スペック末尾の表記が“(AER)”なのに注意。これが“(WEP)”に代わるのは1962年から。またラベルも４番目のモデルの後半から白地に印刷となった。

襟元
ニットの襟は先端が角形で正面をボタンで閉じるデザイン。導入当初のニットの色は本体と同じカーキ色だったが、２番目のモデル（MIL-18342A）からグリーンに変更されている。

着丈が短いのが外観的特徴のJ-WFJ。ここで紹介するのは1960年に発注されたMIL-S-1824B（AER）でJ-WFJ3番目のモデル。表地の色がカーキからグリーンに変更されたのが一番の特徴。他のフライトジャケットと比べて着丈が短いが、これはフライング・トラウザーズとセットで着用するため。ポケットは裾と左腕上腕の３か所に付けられている。（撮影協力：MASH/91-00-3092 USN NAM戦WEP（G8）フライトジャケット/価格６万5450円）

前合わせ
前合わせには遮風用の前立てが取り付けられている。同時期に使用された空軍のMA-1ジャケットは途中から上端が丸くなったが、WEPでは一貫して角形となっている。



スライドファスナー
スライドファスナーはコンマーのアルミ製。写真のものには付いていないが、スライダーの引き手には革製のプル・タブが付くのが一般的。前立ての下端にタブが付いているのに注意。

ポケット
パッチ式ポケットは封筒状で、上部を折り返してスナップファスナーで閉じるデザイン。ポケットには容量を確保するためのマチが設けられている。

ウインター・フライング・スーツ
J-WFJとともに冬期飛行服を構成するフライング・スーツ。ワンピースのナイロン製カバーオールで、上にジャケットとトラウザーズを着用する。写真は後期モデルで、袖口と裾のニットがV字カットで、裏地がレスキュー・カラーのインディアン・オレンジとなっている。

TOKYO MARUI

GAS BLOWBACK SHOTGUN
SAIGA-12SBS

Photo & Text by Takeo Ishii
東京マルイ☎03-3605-1113
www.tokyo-marui.co.jp

3発同時発射ガスブローバック・ショットガン第2弾は、フルオート可能な超ショートバレル!

“ガスブローバックの3発同時発射ショットガン”として鮮烈なデビューを飾りトイガン業界は騒然、ファンを狂喜乱舞させた東京マルイ／SAIGA-12Kが、超ショートバレル、拡張性の高いレイルド・ハンドガード、装弾数倍増&ガス容量大幅UPのロングマガジン、そしてフルオート機構まで搭載し、戦闘力・機動力を極限まで高めたバトル・カスタムに!

●マイクロプロサイト（ブラック）7,480円
●マイクロライトCQX（ブラック）7,480円

月刊

THE グリーンベレー GREEN BERET vol.56

SPECIAL FORCES CIF COMPANIES Part 5

特殊部隊CIF中隊特集パート5

文・イラスト／DJちゅう
写真／U.S.ARMY
モデル／たらこ（@ziguzagu75）

CIF誕生のルーツを紐解くとブルーライトという１年限りの活動だった米軍初の対テロ部隊から始まり、空白だった1980～90年代はDET-A/PSSEが、当時最前線だったヨーロッパで対テロ任務を請け負っていました。東西冷戦が終了するのに合わせて解体されたPSSEと同時に、米陸軍特殊部隊司令部は新たに現存のグリーンベレー内の３つの中隊を対テロ任務へとシフトチェンジ。ここで遂に、我々の愛してやまない、憧れのCIF中隊が誕生するのです。前回はCIFの誕生の瞬間と訓練コースを紹介しましたが、パート５となる今回は、設立されたばかりのCIFの歩みと、9.11以降フィリピンに派遣されたC-1-1のスタイリングをご紹介していきます！

参考文献
jackmurphywrites.com「SPECIAL FORCES TO DISBAND THE COMMANDERS-IN EXTREMIS-FORCE（CIF）」HIGHSIDE「Revenge on the CIF – How "The Haters" Cut Special Forces' Last Link To JSOC」、SWCS.MIL「Distinguished member of the special forces regiment」、Iraq War News「Operation Provide Comfort」

ニッポンのちからこぶ

写真・文／菊池雅之

新編・第2特科団

2024年3月――。
陸上自衛隊に新しい部隊が加わった。
それが「第2特科団」だ。
これまであった西部方面特科隊を拡大改編し、
スタンドオフミサイルから野砲までを配備する。
これまで陸自にはなかった新たな特科部隊の誕生だ。

【後編】

第２特科団の本部が置かれる湯布院駐屯地のグランドに展開するMLRS（手前）と12式地対艦誘導弾。現時点でも充分射程の長いロケット弾とミサイルではあるが、近い将来、島嶼防衛用高速滑空弾や12式地対艦誘導弾能力向上型も配備することになる。

陸上自衛隊では特科部隊の大改編を断行中だ。最終目標は長射程のスタンドオフミサイル（巡航ミサイル）を配備し、1,000km近く離れた遠距離の目標を叩く攻撃力を有すこと。

陸自が発足した当時から冷戦期、そして現在に至るも、特科部隊の役割は、野砲を使って後方より前線で戦う味方を火力支援する事に変わりはない。1980年代に入ると、地上から洋上の艦艇を攻撃できる88地対艦誘導弾も特科部隊が扱うことになった。その後継となるのが12式地対艦誘導弾だ。これがスタンドオフミサイルへと続く第一歩となる。

特科改編の象徴となるのが、2024年３月に湯布院駐屯地（大分県）で新編した第２特科団だ。この部隊が将来的に日本初のスタンドオフミサイル部隊となる。第２特科団の前身となるのが、西部方面隊直轄の特科部隊であった西部方面特科隊だ。

改編直前の編成は以下の通り。

隊本務

・本部中隊

・西部方面特科連隊

・第５地対艦ミサイル連隊

・第301多連装ロケット中隊

この中でまず注目したいのが第５地対艦ミサイル連隊だ。この部隊は、健軍駐屯地（熊本県）に本部を置き、本部管理中隊と第１～第４射撃中隊という編成だった。12式地対艦誘導弾を初めて配備した実戦部隊となった。真っ先に配備した理由は、今、最も脅威の度合いの高い日本の南西諸島部を守るためだ。中国海軍艦艇は奄美群島沖や宮古海峡などを我が物顔で遊弋している。周辺の島々がいつ狙われるか分からない、危険な状況だ。そこ